



福石山



眼鏡石



石橋



高峯

特集

平戸八景

その地域の美しい景色や名勝を選定した八景。近江八景や金沢八景など、全国にはさまざまな八景が選定されています。

その多くは、江戸時代に選定されたようですが、私たちの身近にある「平戸八景」が選定されたのもちょうどその頃です。

平戸八景と言つと、その名前から佐世保には関係ないように思われがちですが、近年の市町合併で、その全てが佐世保市内に所在することになりました。

今回の特集では、この平戸八景にスポットを当て、江戸時代に選定された本市の素晴らしい景観などを紹介します。

八景のルーツ「瀟湘八景」

「八景」とは文字どおり、一つの地方の優れた景勝地などを8カ所選定したもの。このように8カ所を選定する風潮は、北宋時代(11世紀)に中国の画家・宋廸（せいじき）が描いた「瀟湘八景」が始まりとされています。これに倣い、日本でも近江八景や金沢八景など、さまざまな八景が選定されるようになりました。現在、全国では約960カ所の八景が選定されていると言われています。

平戸八景

「平戸八景」は全国で八景の数が大幅に増加した江戸時代に選定されました。選定したのは、当時、平戸から佐世保周辺までを治めていた平戸藩第10代藩主・松浦熙（まつらぎ）（観中公）。熙公は、「高巖」「潜龍水」など、藩内の名勝や奇岩を選定し、それを京都の画家・沢渡広繁（さわわたひろしげ）に依頼して「平戸領地方八奇勝図」を嘉永元(1848)年に出版。平戸八景はこれを機に世に広まりました。

全国に数ある八景ですが、平戸八景のように、八景全てが一つの行政区域に所在し、江戸時代に選定されたものが全て残存している事例は非常に希少で、歴史学などの観点からも高く評価されています。

※P4、P5の写真は、「平戸領地方八奇勝図（松浦八奇勝図）」（早稲田大学図書館蔵）に描かれた平戸八景。P4の右上から上下に「高巖」「潜龍水」「石橋」「天悲観」「眼鏡石」「岩屋宮」「福石山」「潮之目」。



潮之目



岩屋宮



天悲観



潜龍水



潜龍水

江迎町田ノ元、吉井町草ノ尾

神龍が潜む滝

江迎川上流にある滝。文政12（一八二九年）、平戸藩主・松浦熙は領内を巡視した際、この滝の素晴らしさに心を打たれ「潜龍ノ滝」と命名しました。滝の高さは約20m、滝つぼの深さは約6mあり、男滝と女滝の2つに分かれています。落ちる水は岩に当たって砕け、その飛沫は霧のように冷涼で、まさに別世界の趣。神龍が潜んでいるという伝説も容易に想像できます。滝つぼから下流へ流れる「筋の滝は、それぞれ「布引の滝」「不動の滝」と名前が付いています。

不浄のもの立ち入るべからず

熙公はこの滝を神として祀り、荘厳な神域として上流で不浄のものを洗うことを禁じました。滝の入口には、石門を設けて銅製の扉とともに石垣を築きましたが、銅製扉は明治期に撤去され、現在は石垣だけが残っています。石門の右下には「此所より内不浄のもの立ち入るべからず」と記された禁制の石柱が立っています。

石門の約10m先には鳥居と2基の石灯籠が残されています。鳥居には「龍門」の石額が掲げられ、裏面には「文久十三年八月三日肥前守従五位源朝臣熙」の銘文があり、石灯籠には「天保十四年八月」の銘が確認できます。また、鳥居の左側には「是れより内はきもの無用」の禁制の石柱も残存しており、鳥居から滝つぼまでは、神域として土足で立ち入ることを禁じていました。

傑作「龍門」の文字

潜龍水までの道のりに残されている石額や銘文は、熙公の自署であるとされています。公は書に秀で、特に「額法」を研さんし、藩内の神社、寺院、その他の額、石碑などに名筆を振るいました。その中でも「龍門」の文字は傑作の出来であると伝えられています。

1 雨が続いた後で水量が増した潜龍水(潜龍ノ滝) 2 滝行を行う参拝者 3 布引の滝(左)と不動の滝(右) 4 不浄禁制の石柱 5 熙公の傑作と言われている「龍門」の石額



2



3



5

4

1

福石山

福石町、若葉町

福石山の羅漢窟は、福石観音境内地の西端に所在し、斜面地の中腹にあります。間口約60m、高さ約4m、奥行き約5mで、平面形状は三日月型になっています。

羅漢窟については、大同年間(806~810年)に、弘法大師が福石観音を訪れた際、この洞窟に行基を追慕して五百羅漢を安置し、それ以来、羅漢窟と呼ばれたという伝説が残っています。

弘法大師が安置した五百羅漢は長い年月の間に散逸してしまいましたが、天明8(1788)年に平戸藩主・松浦静山によって再建されたという羅漢像は、太平洋戦争中まで洞窟を埋め尽くすように安置されていました。しかし、太平洋戦争後、羅漢窟は一時的な住宅として利用され、五百羅漢は頭・手・足が欠損し、現在では142体が残存するのみとなっています。



1 羅漢窟に行く途中に安置されている中世石塔群 2 頭部が修復された五百羅漢像の一部
3 三日月型の独特の形状の洞窟に安置されている五百羅漢像

潮之目



早岐2丁目・3丁目、有福町
早岐瀬戸で最も狭い幅約10mの瀬戸。潮の干満によって激流を作り、「速来」=「はいき」という地名の由来になりました。以前、木製橋がありましたが、昭和11年に開閉橋が架橋。その後、昭和29年の基幹道の整備に伴い、開閉橋に平行して拡幅された橋が新たに架橋されたため、開閉橋は撤去されました。

岩屋宮



須佐神社境内 高梨町
神殿は天然の砂岩製洞窟になっており、間口約5.4m、奥行約10.8m。御座所の真下は深い井戸になっており、その清水は境内の水神社に湧き、現在も他県から霊水を求める参拝者があります。以前は天然洞窟の神体・神殿が露頭していましたが、昭和38年に本堂が建立され、神体などは見えなくなりました。

眼鏡石



眼鏡岩寺境内 瀬戸越町
眼鏡に似た形状から命名された奇岩。高さ約10m、幅約20m、厚さ約6mの砂岩の1枚岩に直径約8mと約5mの巨大な穴が2つ並んでいます。数十万年前は海底にあったものが隆起し、波の作用や風化により貫通したと考えられています。大きな鬼が目を覚まし、背伸びをした時に足で岩を蹴破ったとの伝説もあります。

石橋



御橋観音寺境内 吉井町直谷
全長約30m、幅約5mの2本の天然石橋。高さは約20m。平戸領地方八奇勝図では、橋の上を歩く人の様子が描かれていますが、現在は歩くことはできません。周辺は国指定天然記念物のシダ植物群落が生息し、多くの種類の暖地性シダ類が生息する場所として有名。秋には紅葉の名所としてもにぎわっています。

大悲観



小佐々町小坂
大悲観公園にある高さ約20mの砂岩の浸食残丘。「大悲観」の文字は文政13(1830)年に松浦熙公が揮毫し、それを拡大して彫り込ませたもの。「平戸藩史考」には、熙公が岩の向こうの景色を夢に見て、それを確かめようと岩に登ろうとしたが、家臣たちに制止されたため代わりに文字を彫らせたというエピソードが記されています。

高巖



江迎町小川内
江迎川沿いにある高さ約30mの砂岩岩壁。以前はこの真下を平戸往還が通っていました。風化や振動等で崩落している箇所があり、古松が枯れるなどして平戸領地方八奇勝図に描かれた画と少し異なりますが、青空に屏風のように巨岩が峻立している風景は今も変わらず残っています。